

イエメン・イスラーム史

信者達の長ウマル・ブン・アルハッターブの時代のイエメンの総督達はと言うと、初代カリフの時代の総督がその儘その座に就いており、以下の者達がいた。サヌアーではヤウリー・ブン・ウンミーヤそしてアルジュンドではアブドゥッラー・ブン・アビー・ラビーア・アルマハズーミー等がいた。

ウマルの時代には、彼のイエメン総督ヤウリー・ブン・ウンミーヤによるナジュラーンのキリスト教徒達の一扫があったが、これは使徒の「アラビア半島に二つの宗教を存続させない」という遺言を実行したものであった。また初代カリフのアブー・バクルの死亡時にもこの件は検討し続けられていたが、それは彼の短い在任中に最も重要性を帯びた出来事が目白押しだったために、使徒の遺言を実行することが出来なかったからでもあった。その件に関するウマルのイエメン総督に対する教書（注31）は次の様なものであった。

「彼等を連れて来るが良い。だが彼等の宗教からの離脱を強制してはならない。そして自分の宗教を固持する者を一扫し、イスラーム教を定着させよ。そして彼等の中で去っていった者達全ての土地を測量して、それから彼等に国を選び、彼等の土地だったものに見合う土地を与えるが良い。それは我々自身に対する権利を彼等にも認めるものであり、神が命じられた彼等の被保護民としての（権利）を履行するためのものであり、イエメンの民である彼等とその隣人達との間で耕作地を所有することに関して交換を行うものである」。

（注31）「イエメン・イスラーム史」 P.106

「イスラーム下のイエメン」と言う本で著者は明快にこの件に関して付け加え、こう述べている。（注32）

「ナジュラーンの民と言えば、彼等は余剰物を追い求め、その富は増え、その勇敢さにより力を強くして、経済面でその地域を支配した。その為この地域では、これらのキリスト教徒達に対するイスラーム教徒達の状態は弱いものとなっていた。そこでウマルはその結果を恐れ、その地から彼等を一扫した。と言う訳で彼等の一部はシリア地方に住み、一部は彼等によってそう呼ばれることになった（イラクの）クーファ行政区のナジュラーン区に住み着いた。ウマルはこれ等ナジュラーン（出身）のキリスト教徒達に対して、この（移住）件に関する契約書を書きこう述べている。「シリア地方やイラクの民で、その契約書に署名する者達は、その土地を耕すことを可能ならしめよ」。しかし彼等は全くそうした取引はしなかった。何故なら彼等はイエメンに自分達の土地を持っていたからである。そこで彼等は（強制的に）散り散りにさせられた。ウマル・ブン・アルハッターブは彼等が強制移住させられたナジュラーンの土地に関しては、シリア地方とイラクの土地をもって彼等に保証した」。

（注32）「イスラーム下のイエメン」 P.51

また次に述べる事も価値がある。つまり彼等はその後、この交換を後悔し、ウマルの許に来て、こう言った。「我々に対して契約を無効にさせてくれ」。しかしウマルはそれを拒否した。アリー・ブン・アビー・タイリブが（第4代カリフとして）後を継いだとき、彼等はアリーに、自分達を自分達の地域（ナジュラーン）に戻すよう要求した。しかしアリーはそれを拒否して、こう言った「ウマルこそ、正しく物事を行った者だ。だから私は彼と違うことを好まない」。

またウマルは、知事達に対して断固たる態度をとっていた。エジプトのアムル・ブン・アルアース総督との関係においても同様の沢山の例を持っていたし、彼以外のイスラーム帝国の知事達との関係もそうであった。中でも我々の関心を引き起こす事は、イエメン総督ヤウリー・ブン・ウンミーヤとの関係についての幾つかの事例を提示することであろう。ウマルは後述する2つの問題でヤウリーをマディーナに召還した。また3番目の問題の件で、彼を召喚した時ウマルが死んだ。ヤウリーは丁度その時サヌアーからマディーナに向かう旅の途中であった。そこで信者達の長（第3代カリフ）ウスマーンの使者（彼はヤウリーの行為に対するウスマーンの決定をヤウリーの元に運ぶ使者）であったが、（道中で）ヤウリーと会い、ヤウリーはそのままサヌアーに引き返した。

信者達の長（第2代カリフ）ウマルがヤウリー・ブン・ウンミーヤをマディーナに召喚した3つの問題は次の様に要約出来る。

第1の問題は、ハッフアーシュとマルハーン一族の男が、ヤウリー・ブン・ウンミーヤの元に彼の息子が殺害された、と苦情を申し出て来た事であった。ヤウリーはハッフアーシュとマルハーン地方の彼の代理人サイド・ブン・アブドッラー・アルキンディーに殺人を犯した者を連れて来る様に命じた。

彼の下に連れて来られた彼に対する刑罰が明らかになった時に、人々の眼前に連れ出され、殺された者の父親に刀を与えた。そしてヤウリーは彼に次の様に言った。「彼を殺せ。この者達が証言者になろう」。そして父親は彼を死に至まで剣によって打ち据えた。その男もまた他の者達も既に彼が死んだものと思った。

そこで彼の一族の者が彼を埋葬する為に彼を運ぼうとした。すると彼がまだ呼吸をしているのが分かった。そこで彼に治療を施し、彼はとうとう回復した。或る日彼が羊の群れを放牧している時に、殺害された者の父親が傍を通りかかり、彼が（未だ存命なのを）知った。

そこで父親はヤウリーの元に行きこう言った。「私の息子を殺した男が羊を放牧しているを見つけました」。そこでヤウリーは、ハッフアーシュとマルハーン地方の彼の代理人に、殺人を犯した者を連れて来る様に命じた。そこで代理人は彼を生きたまま送ったが、彼には剣で撃たれた無数の傷があった。ヤウリーはその弁償額を見積もるように命じた。それは「血の贖い」の額に相当するものであった。そこでヤウリーは殺された者の父親に言った。「も

しお前が彼を殺したいのであれば、お前は血の贖いが必要になる。さもなければ彼を放免しろ」。

父親は怒り、ウマルの許に、ヤウリーが彼と息子を殺した者との間を邪魔している、と不平を言い、ウマルに救いを求めに行った。ウマルは怒り、アルムガイヤラ・ブン・シュブアをサヌアーに派遣した。そして彼にヤウリーを彼の元に連れて来るように命じた。アルムガイヤラはヤウリーの処にやって来て、彼をウマルの元に否応なく送った。

彼がウマルの元にやって来き、その問題について説明した時に、ウマルはヤウリーを裁く事に関して（4代目カリフ）アリーに相談した。アリーはウマルにこう答えている。「ヤウリーは既に真実の裁定を下している」。ウマルはヤウリーをイエメンでの職務に戻した。

アルムガイヤラはイエメンからメディーナに戻って来た時に次の様に言っている。「誓って言うが、たとえ彼が罷免されても、総督の職にあってもヤウリーは私より優れている」。

第2の訴訟は以下の様な次第である。ウマルがヤウリー・ブン・ウンミーヤをこの件で再度イエメンからメディーナに召喚することになるのであるが、その内容はヤウリー・ブン・ウンミーヤの兄弟であるアブドゥルラハマーン・ブン・ウンミーヤが一頭の牝馬を若い牝駝駝100頭分で買った事に端を発する。お互いの間で売買が完了した時に、売手は自分の馬が惜しくなりアブドゥルラハマーン・ブン・ウンミーヤの元に赴き、売買の取消を求めたが、彼は応じなかった。

そこでウマルの処にやって来てヤウリーとその兄弟が私の馬を無理矢理奪ったのです、と申し出た。ウマルはヤウリーに手紙を遣わし、彼の元に来る様に命じた。ヤウリーがウマルの元にやって来て、彼に起こった通りの事を説明したところ、ウマルはヤウリーにこう言った。「お前達の処では、馬はこの様な値段になるのか？」ヤウリーは言った。「はい」。そこでウマルは言った。「その値段では、我々は40頭の羊は手に入れることは出来るが、馬に関しては何も手に入れる事は出来ない。これからは馬1頭について1ディナールで手に入る様に」。そしてウマルはヤウリーを彼の職務に戻した。

ウマルがヤウリーをサヌアーからメディーナに召喚した第3の訴訟は、以下の様な次第である。ヤウリーの軍長官達の一団が或る男を殴った。その男はウマルの処にやって来て彼に言った。「嗚呼、信者達の長よ、ヤウリーの軍長官達が私を殴ったのです」。ウマルは言った。「彼等が（殴るのを）思い止まるまでか？」その男は言った。「私が血を流すまでです」。

そこでウマルはヤウリーに手紙を遣り、彼の元に歩いて来る様に命じた。ヤウリーはサヌアーから歩いて出向いて行ったが、その道中で（新しい信徒達の長）オスマーン・ブン・アッファーンの使者が彼と行き会った。使者はオスマーンの書簡を携えていたが、それはウマルの死をヤウリーに報じ、彼を今まで同様イエメンでの職務に任命する、というものであった。それでヤウリーはサヌアーに馬に乗って戻って行った。そして彼はオスマーンが殺されるまで、サヌアーでの職務を続けた。

また同様にオスマーンはイエメン諸州の知事の全員をその儘その職務に任命した。彼等の中にはジュンドの知事アブドゥッラー・ブン・アビー・ラビーア・アルマハウミーがいるが、彼は有名な恋愛詩人のウマル・ブン・アビー・ラビーアの父親である。

ウマルの統治時代からオスマーンの統治時代の初期にかけて、イスラームの開放（征服）は諸地域へと拡大していった（注：33）。その規模は、北はイラクのアルジャジーラ及びアルメニアまで、東はホラサーン及びサジェスターンまで、西はトリポリのビルカ（キレナイカ）及び北アフリカまで、南はエジプトとスーダンの間にあるヌビアまでであった。

（注：33）：「イスラーム・イエメン史」P.78

都市と軍営地在イスラーム解放戦線の軍隊の拠点や前線基地や港湾として次々に築かれていった。軍人達には勝利を収めたムスリムとしての封土（イクターウ）と私有地が支給された。これらの軍人達は遠く離れた自らの故郷との絆を断ち切られたが、今度は新たな自分達の拠点から（イスラーム）拡張と解放戦線に旅立っていくことになったのである。

信者達の長オスマーン・ブン・アッファーンはヘジラ暦30年に、とうとう次の様に規定された歴史的な決意事項を公布した。「イスラーム開放戦線において勝利を収めた者は、遠く離れた故郷の所有地に代えて、今度定住した地域の新しい土地を所有する」。

この決定の後、最早彼等は帰郷しようとは考えなくなった。そしてこの事はウマルの時代以降、毎年恩給と報酬が下賜されるに加えて、解放戦線の戦利品の財等も付け加えられることになった。

イエメンの各種族は、封土地を得、其処に定住出来ると言う恩恵に与ったのであるが、イエメン人達は、各部族間の調整や新たに住むことになる地域で部族を均等に配置する件に関してリーダーシップを発揮した。

この様にクーファの地では、イエメンの各族長、即ちアビー・ムーサー・アルアシュアリーやジャリール・ブン・アブドッラー・アルバジャーリそしてアルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーのそれぞれに、広大な封土地が聖戦の際の奮闘と勇敢さの度合いに応じて分与された。

またクーファの地が分与された様に、バスラの地や他の地も分与された。イエメン人達は、イスラームが拡張していく上での聖戦に於いて、勇氣ある行為がかわれてバスラの地に十分な領地を獲得したのであった。

一方大シリア地方はと言えば（注：34）、イエメンの諸部族が、そこの諸軍隊に分散していた。ホムスの町の人々の軍隊は、その全員がキンダ族やヒムヤル族やハムダーン族、或いはそれ以外のイエメン諸部族であったし、同様にダマスカスの人々の軍隊の大部分を形成するのもイエメン人達であった。

またアルアシュアリー族の人々はヨルダンのタバリアの軍隊の大部分であった。そしてア

ルフスタート（エジプト、カイロ）の諸地区においてイエメンの諸種族は、アラブの他部族より数で上回っていた。またそこ（フスタート）ではキンダ族から成り立っているアッサダーフ、トゥジブ、アスクーン等の地区、ヒムヤル族から構成されているハドラマウト、ハウラーン、マズハジュ、ヤフシブ、ライーン、アルキラウ、アルマアフイルの地区が、キダーア族及びそれ以外の部族から成り立っているマハラとバリーの地区等があった。

そしてその諸部族をルフスタートの諸地区に住まわせる事に関して。アマル・ブン・アルアースが委任した人々の中には、ムアーウィア・ブン・ノダイジュ・アスクーニーやアマル・ブン・カフズム・アルハウラーニーとジュバイル・ブン・ナシーラ・アルマアフイーリー等がいた。

（注：34）：「イスラーム・イエメン史」P.77

信徒達の長オスマーンが殺され、信徒達の長として第4代カリフのアリー・ブン・アビー・アッターリブが就任した時、彼はサヌアー及びその行政区の知事であったヤアリー・ブン・ウンミーヤ並びにアルジュンドとその行政区の知事であったアブドッラー・ブン・ラビーア・アルマフズミーの両名を罷免し、サヌアー及びその行政区にはウバイドウッラー・ブン・アルアッバースを、アルジュンドとその行政区にはサイド・ブン・サアド・ブン・イバーダ・アルアンサーリーをもって彼等に替えた。

ヤウリー・ブン・ウンミーヤはアリーを恐れてイエメンをあとにした。彼はイエメンから多くの財産を持ち出したが、その一部をもってタルハ・ブン・ウバイドウッラーとアルズベイル・ブン・アルワームやアブー・バクルの娘アイシャに対して60万ディナールと600頭の駱駝を援助した。この駱駝の中にはアスカルと言う名の駱駝がいたが、これはアリーとアイシャとの間の有名な「駱駝の日」に絡んだ駱駝であった。

（翻訳者注）：「駱駝の日」預言者ムハンマドの妻アイシャと第4代カリフのアリーとの間に起こった事件は、クルアーンにも記されているが、彼女に姦通の嫌疑が掛けられた折に、アリーが彼女を擁護しなかった事に端を発する。656年12月、タルハとアズベイル及びアイシャが第3代カリフであったオスマーンの死後、アリーに反旗を翻し、バスラ近郊で戦いを挑むが敗北する。その後アイシャはメディーナで蟄居し、政治に介入しなかった、とされている。

ヤウリーはイエメンから移動して来た直後、メッカでバスラへの途上であったアイシャ達の一団と会いアリーからの離反を決めた。ヤウリーが彼等に援助したのは、ザカート（宗教的義務行為の喜捨）等の国家財産であり、アリーに支払われなければならぬ筈のものであった。

同様に大シリア地方ではオスマーンの時代からシリア総督だったムアーウィヤ・ブン・

アビー・スフィヤーンがアリーに反抗していた。彼はイスラーム諸州全域において、アリーと覇権を争っていた。その中にはイエメンも含まれており、ムアーウィーヤはブスル・ブン・アルター・アルアーミリーをイエメン総督として送り、ブスルを長としてシリア地方から彼の一族からなる3000人の兵士達を付けてやった。

ブスル・ブン・アルター・アルアーミリーがサヌアーに近づいた時、アリーのイエメン知事であったウバイドゥッラー・ブン・アルアッバースは、サヌアーやそれ以外の町の顔役達を集め、彼等に戦いを促す演説をし、ムアーウィーヤの任命した総督に抵抗した。しかし人々は、ウバイドゥッラーへの支援を差し控えた。

ファイルズ・アルダイラミーがウバイドゥッラーにこう答えた。「我々は戦いをしたくない。だから貴方は自分の身を自分で守りなさい」（注：35）ウバイドゥッラー・ブン・アルアッバースは彼等からの支援の望みを断ち切られたので、荷造りをしてアムル・ブン・イラーク・アッサカーフィーを自分の代理とし、自分の2人の息子のアブドゥルラハマーンとカシムをアブドゥルマダーン族に属する母方の叔父に預け、アリーの許へと戻っていった。

（注：35）：「鑄造された黄金」アルハジュラジー著、P.30

ムアーウィーヤの名の（威光の）下でブスルはイエメンで影響力を上げた。そして流血事件も引き起こした。それはイスラーム史上イエメンにおける最初の流血であった。つまりアブー・バクルの時代の初期にイエメンで起こった背教運動と反乱が終結した後での最初の流血だったのである。

ブスルはウバイドゥッラー・ブン・アルアッバースが残した代理人アムル・ブン・イラーク・アッサカーフィーを殺し、2人の息子も殺した。サヌアーにはこの2人の墓の上にモスクが建てられ、殉教者のモスクと呼ばれて今でも賑わっている。またアブドゥルマダーン族の中でアブドゥラー・ブン・アブドゥルマダーンと彼の息子マーリクそして一族の70人の男達も殺され、多くの財産が奪われ、その中にはブスルへの協力を拒否した罰として、奪われたシャルハビール・ブン・アブラハ・ブン・シャルハビールの財産もあった。

奇妙な事に（注：36）、ハマダーンの人々や信者達の長アリー・ブン・アリー・アッターリブの支援者達が、ムアーウィーヤの任命したイエメン知事のブスル・ブン・アルター・アルアーミリーの助力に立ち上がった。何故ならアリーがハマダーン（の人々への同盟）の旗印をハーシド地方のラーフィア族のアブー・マアイド・ブン・ハムザから、やはりハーシド族のマルブ家に属するサイド・ブン・カイスへと変えたのを根拠にそうしたのであった。

しかしアリーはブスルを追放するために、既にイエメンにハーリサ・ブン・カダーマ・アッサディーを長とし、彼にバスラとクーファから来た4000人の騎馬隊を付け派遣した。そこでハーリサは信者達の長アリーの名で彼の影響力をイエメン全土に上げた。

ブスル・ブン・アルター・アルアーミリーはイエメンから逃げたが、彼の支援者達や彼に

従う大勢の者達をハーリサは捕らえ、その大部分を殺害した。

(注：36)：「イスラーム・イエメン史」Dr.ムハンマド・アミン・サーリフ著P.108

イエメン人達はブスル・ブン・アルター・アルアーミリーの2人の子供がメッカの近郊にいることを察知した。そしてウバイドゥッラー・ブン・アルアッバースの2人の息子をブスルが殺害した罰として殺した。

イエメンとヘジャーズ地方及びイラクとホラサーンの人々はアリーの支援者であった。一方、大シリア地方の人々はムアーウィーヤの支援者であった。

イエメンの外にいたイエメン人達とは言えば、アリー派とムアーウィーヤ派に分かれていた。ハムダーン族やマズハジュ族は凡そアリー派に属し、ヒムヤル族やアッカ族そしてアルアシュアリー族はムアーウィーヤ派に属していたが、後者はムアーウィーヤが総督であった大シリア地方におり、また彼の地がムアーウィーヤにとって、オスマーンの血の贖いを求める、と言う名目でアリーに反対する為の出発地点であったからだ。

アルアシュタル・アンナフィーはアリーの軍団の右翼の将軍であったが、エジプトに向かう途上で謀略により毒殺された。またヒムヤル族のズー・アルキラウ・アッスマイフィウ・ナコールはムアーウィーヤの軍団の右翼の将軍であったが、アリーとムアーウィーヤの間で交わされた戦闘の一つで殺された。

イエメン人達はこのような分裂により、お互い殺し合いを始めた。アリーは自分の教友達を自らのカリフ職の正当性を論拠に奮起させた。ムアーウィーヤは自分の教友達をオスマーンの血の贖いを要求する、という名目に基づいて扇動し、最終的な裁定に至るまで、と言う口実で復讐の（方法を）とった。アリーとムアーウィーヤの間の戦闘は、アリーがアブー・ムサー・アルアシュアリーとアマル・ブン・アルアースのそれぞれによる仲裁を強いられるまで続いた。

アルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーはヘジラ暦37年サファル月に仲裁書を読み上げた。その仲裁書の証人は9名であったが、その内6名はイエメン人で、前述のアルアシュアス・ブン・カイスとサイド・ブン・カイス・アルハムダーニーとハジャラ・ブン・イッディー・アルキンディーそしてジャービル・ブン・ヤヒヤー・アルバジャリーとアスマト・ブン・ジャード・アルハドラーミーがいた。

アリーの軍隊は、仲裁の直後に解体され、また仲裁に満足しない隊は、アリーの軍隊からクーファの近郊のホルラーウという村へと離脱し、彼等はその日から、アルハワーリジュ派とかアルホルーリイヤ派として知られる様になった。後にアリーはアルハワーリジュ派のアルムラーディー族のイブン・マルジムの手によって、ヘジラ暦40年に殉教させられた。

ウマイヤ朝とアブドッラー・ブン・ズバイルの時代のイエメン

(ヘジラ歴41～132年、西暦661～753年)

信者達の長アリー・ブン・アブターリブが、ヘジラ歴40年（西暦661年）に殉教してからムアーウィーヤ・ブン・アビー・スフィヤーンが支配権を握り、アルハサン・ブン・アリーがムアーウィーヤに降伏した。ムアーウィーヤ・ブン・アビー・スフィヤーンはイスラーム諸州全てに自分の知事を派遣したが、その中にはイエメンも含まれていた。ヘジラ歴60年（西暦680年）の彼の死に至るまでのイエメンの知事達（注：1）を列举すると次の通りである。

1－オスマーン・ブン・アッファーン・アッサカフィー

2－ムアーウィーヤの兄弟のアタバ・ブン・アビー・スフィヤーン。彼はサヌアーとアルジュンドに居を構え、サヌアーには彼の代理を置いた。彼の統治は諸説あるが2～3年続いた。

3－その後アタバの兄弟のムアーウィーヤ自身が継ぎ、イエメンには代理として、ファイルーズ・アッダイラミーを置き、その職務は8年にわたった。ファイルーズ・アッダイラミーは、我々が周知の如く、ムアーウィーヤの総督ブスル・ブン・アルター・アルアーミリーの到着直後に、アリーの総督であったウバイドッラー・ブン・アルアッバースが去って以来、ムアーウィーヤに対する信頼を保持し続けていた。

4－アタバ・ブン・アビー・スフィヤーンの没後、ムアーウィーヤは後任としてアルヌアマーン・ブン・バシール・アルアンサーリーを任命した。

5－次に1年後に彼を解任し、バシール・ブン・サイード・アラアーリジュリストになる。

6－それからサイード・ブン・ダーザワイヒ・アルファーリシーとする。

7－それから9か月後にサイードが亡くなった時、ムアーウィーヤはその後継者にアッダハーク・ブン・ファイルーズ・アッダイラミーを任じた。彼の統治はムアーウィーヤが亡くなるまで続いた。

8－次にヤジード・ブン・ムアーウィーヤがカリフとなった時、ブハイル・ブン・リーシャー・アルニムヤリーを2つの属州、即ちサヌアー州とアルジュンド州を含むイエメン総督に任じた。ヤジードは毎年納税されるお金を添えて、イエメンをこの人物に分け与える事にしたのである。ブハイルは支配者層の名家の生まれで、過酷な徴税人であった。

ブハイルは軽薄な質問をされるのが嫌だったので、ちょっとした軽口を叩く者を処罰する事さえあった様である。或る時、ブハイルに会いにヘジャーズを出て来た或る男が、アラブの詩の形式に則ってブハイルを讃えてこう言った。

ヒムヤルを治めるブハイル・ブン・リーシャーンの

持ち物はまるで肥沃なユーフラテスの様

彼は望んだ。ブハイルに一人娘が欲しいものだがなと

高貴な自由人の恩恵は多くのものである。

ブハイルは彼に立腹して、こう言った。「ヘジャーズからわしの処にやって来て、わしの娘以外に何も望まないのか。お前をこっぴどい目に遭わせてやろう」。この後ブハイルの命が下り、この男は鞭打たれたのであるが、この男には生まれたばかりの10赤子と毎年褒賞金を授けた。ヤジード・ブン・ムアーウィーヤの治世する3年間、ブハイルによるイエメンでの統治は続いたのである。

9－ヒジャーズ、イラク、イエメンにわたる支配権をアブドッラー・ブン・ズベイルが引き継いだのは、ムアーウィーヤ・ブン・ヤジード・ブン・ムアーウィーヤがヘジラ歴64年（西暦684年）に降伏した後の事であり、その折にアッダハーク・ブン・ファイルーズ・アッダイラミーがイエメンを統治した。

10－しかしこの1年後には、アッダハークは、アブドッラー・ブン・ズベイルに罷免されたが、その後任にアブドッラー・ブン・アブドッラハマーン・ブン・ハーリド・ブン・アルワリードが、サヌアーとアルジュンドとその行政区を治めることになった。この他ハドラマウトには、イマーラ・ブン・アマル・ブン・ハズム・アルアンサーリーを任じたが、その外の統治者は言及されていない模様である。

11－ズバイルは暫らくすると、アブドッラー・ブン・アブドッラハマーン・ブン・ハーリド・ブン・アルワリードの後任にアブドッラー・ブン・アブドゥルムッターリブ・ブン・ワーディア・アッサハーミーを充てた。

12－更に1年後には、アッサハーミーを廃して、自らの兄弟であるウバイダ・ブン・アルズバイルをその地位に就けたのである。しかし彼の就任期間は5か月以上続かなかった。

13－ズバイルはその後任にハサン・ブン・アブドッラー・ブン・アルファキーフを充てた。

14－上記の人物がその地位に就くやいなや、直ちにカイス・ブン・ヤジード・アッサアディー・アッタミーが後任となった。

10か月後にズバイルが彼を廃してから後任の総督を任命したが、彼等の中には、彼等の任期が4か月足らずの者まで含まれていた。歴代総督中、アッダハーク・ブン・ファイルーズ・アッダイラミーが再選された他、ハッラード・ブン・アッサイブ・アルアンサーリーや(3代目カリフである)オスマーン・ブン・アッファーンのジンミー（庇護民）であり、最後の総督となったアブー・アンヌジュード等がいた。

また彼の時代にアルフルーリーヤ派（アルハワーリジュ派）がサヌアーにやって来た時に、サヌアーの法官ワハブ・ブン・ムナッバフは彼等と一戦を交える為に人々を集めた。法官に対して人々は言った。「我々はハワーリジュの奴輩と交戦する力などありません。それより彼等の流す血がイスラーム法に適うものなのか不安なのだ」。これを聞いてワハブ法官とサヌアーの名士達は、10万ディナールを元手にハワーリジュ派がサヌアーから退城することを条件に妥協が図られたのである。

サヌアーの人々はこの資金調達のために、（イエメン）諸州の人々に援助を乞うた結果、人々はサヌアーの住人達を支援した。この時以来、イエメンの諸状況は混乱を極めていくことになるが、ヘジラ歴73年にアブドッラー・ブン・ズベイルが殺されるまで、この混乱は続くのである。この事はズベイルが約9年間イスラーム教徒達の諸事をまとめる為に、カリフとして君臨した後の事であった。

ヘジラ歴65～86年にかけて統治していたアブドゥルマリク・ブン・マルワーン率いる軍隊の指揮官を務めていたアルフッジャージュ・ブン・ユーセフ・アッサカーフィーの手でこのズベイルは殺されたのであった。

アブドゥルマリク・ブン・マルワーンはイエメンをアルフッジャージュの治める1つの州とした。アルフッジャージュは、下記の各々の兄弟の中で、ムハンマド・ブン・ユーセフ・アッサカーフィーをイエメンの諸州の総督に、またワーキド・ブン・サルマ・アッサカーフィーをアルジュンドとその行政区の長に、アルハカム・ブン・アイユーブ・アッサカーフィーをハドラマウトとその行政区の長に任命した。

この1年後にムハンマド・ブン・ユーセフ・アッサカーフィーの為に、2つの属州であるサヌアーとアルジュンドを統合した。その後ムハンマド・ブン・ユーセフ・アッサカーフィーが亡くなると、アルフッジャージュは、その後継者に従兄弟のアイユーブ・ブン・ヤヒヤー・アッサカーフィーを任じ、その期間は。アブドゥルマリク・ブン・マルワーンの統治した最後の時期（西暦685年まで在位）から、マルワーンの息子の。アルワリード・ブン・アブドゥルマリクの時代（西暦705年まで在位）まで続くことになる。

アッサカーフィーはアルワリード・ブン・アブドゥルマリク（ウマイヤ朝第6代カリフ）の命令で、サヌアーの大モスクの増築をした人物である。その拡張には北面が含まれているが、次の様な証拠がある。（注：2）彼はサヌアーの法官とワハブ・ブン・ムナッバフに対して、「嗚呼、アブー・アブドッラーよ。彼等がキブラ（メッカ方向に向けられるモスク内の窪みを指す）を造り上げるまで彼等と一緒に居なさい」と言って、キブラの基礎造りの監督を命じた。

（注：2）「サヌアー史」アッラージー著、P.82

カリフのアルワリードが死んで、スレイマーン・ブン・アブドゥルマリク（ヘジラ歴96年（西暦715年）まで在位）が（第7代カリフを）継ぐと、（イエメンの）総督もアイユーブ・ブン・ヤヒヤー・アッサカーフィーに代わってアルワ・ブン・ムハンマド・ブン・アッサデーイーが就任した。アルワはスレイマーン・ブン・アブドゥルマリクの時代とスレイマーンがヘジラ歴99年（西暦717年）に世を去った後、ムスリム達の上に君臨することになる、後継者の信者達の長ウマル・ブン・アブドゥルアジーズ（第8代カリフ）の時代にまたがってイエメンを統治した。

ウマル・ブン・アブドゥルアジーズがヘジラ暦101年に亡くなり、アルヤジード・ブン・アルワリード・ブン・アブドゥルマリク・ブン・マルワーンが（第9代カリフを）継ぐと、イエメン総督もアルワ・ブン・ムハンマド・ブン・アッサディーに代わってマスウード・ブン・アルフ・アルカルビーが就任した。

マスウードはアルヤジード・ブン・アルワリード・ブン・アブドゥルマリク・ブン・マルワーンがヘジラ暦105年（西暦724年）に死んだ後、（第10代目カリフ）として後を継いだ彼の兄弟のヒシャーム・ブン・アブドゥルマリクの治世の半分の期間、イエメンを統治した。

それからヒシャームは（イエメン総督を）マスウード・ブン・アルフ・アルカルビーからユーセフ・ブン・ウマル・アッサカーフィーに代えた。そしてユーセフに対してサヌアールとアルジュンドとハドラマウトの3州とその行政区をまとめ、管轄させた。そしてユーセフ自身はハドラマウトに拠点を置き統治した。

カリフのヒシャーム・ブン・アブドゥルマリクはまた同様に、イエメンにおける立法をアルガトリーフ・アッダハーク・ブン・ファイルーズ・アッダイラミーに任せた。

ヒシャームがカリフであった時代、イエメンではウマイヤ朝に対する反乱が起こった。それはアッバード・アッライニーを首領とする反乱で、イエメン各地に広がった。そして彼とイエメン総督ユーセフ・ブン・ウマル・アッサカーフィーとの間で多くの戦いが繰り広げられ、最終的にはウマイヤ家の勝利となった。アッバードは戦争を放棄したが、この反乱はイエメンで次々に起こった革命の最初の火種となった。そして後に我々が見るように、ウマイヤ朝やアッバース朝の治世下において、その大部分は成功を収めるのであった。

この事はイエメンにおいてユーセフ・ブン・ウマル・アッサカーフィーの統治から13年後の事であるが、カリフのヒシャーム・ブン・アブドゥルマリクは彼にイラクに帰還し、ウマイヤ家から離反したハーリド・ブン・アブドゥッラー・アルカスリーに立ち向かう事を命じた為であった。

ユーセフ・ブン・ウマルは自分の息子のアッサルトをイエメンの代理に置き、イラクに帰還した。そしてアッサルト・ブン・ユーセフ・ブン・ウマル・アッサカーフィーはカリフのヒシャーム・ブン・アブドゥルマリク・ブン・マルワーンがヘジラ暦125年に死亡するまで、イエメンの代理の地位にいた。

アルヤジード・ブン・アルワリード・ブン・アブドゥルマリクがカリフの地位を継いだ時、マルワーン・ブン・ムハンマド・ブン・ユーセフ・ブン・ウマル・アッサカーフィーはアルホッジャージュ・ブン・ユーセフ・ブン・ウマル・アッサカーフィーの甥であるが、彼にイエメン人全土を任した。

この様にアッサカーフィー家はウマイヤ朝の時代の殆どにおいて、後に知る様に、その最

後のカリフであるアルマルワーン・ブン・ムハンマドの時まで、イエメンを統治し続けた。

それは恰もウマイヤ家の人々が彼等の国家を樹立する時に、このアッサカーフィー家に従属していたかの様であり、それ故に彼等に報酬を与えたり、イエメンを統治する権力を授けたりしたのであった。

即ち歴史的真相は、イエメン人達がウマイヤ家の国家樹立と強化に大きな役割を果たしたと言う事であった。

しかしイエメンから非常に多くの指導者達や首長達が、イラク、大シリア、エジプト、アフリカやその他に移住し、彼等がイスラームによる解放（征服）とその伝播に参画し、旅した国々の中で、新しく数多い居留地に定住した事が、ウマイヤ家の人々の見解の中で、イエメンそのものの重要性を減少させてしまい、彼等の心の中でイエメン内部に残った人々に対する畏怖心を弱めてしまった。

そしてイエメンをアッサカーフィー家や他の者達に、イエメンにおける反対運動沈静化の為に、総督達の暴虐や圧制を通してイエメンを統治させることになった。しかしこの事は反対の結果を導いてしまい、ウマイヤ家やそのイエメン総督達に対する反対運動を増大させることになった。この中には、アルヒムヤル系アッライニー族の族長アッバードの運動やターリブルハック「真理を求める者」と通称されたハドラマウト系のアブドゥッラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディーや後に知る様に他の者達がいた。

ヘジラ暦125年にアルワリード・ブン・アルヤジード・ブン・アブドゥルマリク・ブン・マルワーンが殺され、アルヤジード・ブン・アルワリード・ブン・アブドゥルマリク・ブン・マルワーンが彼の後継者になった時、アッダハーク・ブン・ワーシル・ブン・アッシュクシキエをイエメン総督に任命し、イエメンでの法官にヤヒヤー・ブン・シャルハビール・ブン・アブラハを任じた。アルワリード・ブン・アルヤジードはアルヤジード・ブン・アルワリードとの戦いで殺されてしまった。(注3) その戦いでエジプト人達はアルワリードを支援し、イエメン人達はアルヤジードを支援した。

(注3)：「イスラーム下のイエメン」 Dr. イサーム・アッディーン・アブドゥルウーフ・アルファッキー著 P. 72 アッタブリーの歴史書「ヘジラ暦 129年の諸事件」に依拠している。

ヘジラ暦127年（西暦744年）に、ウマイヤ家最後のカリフであるマルワーン・ブン・ムハンマドが権力の座に就いた時、イエメンの2つの州サヌアーとアルジュンド並びにその行政区にアルカーシム・ブン・ウマル・アッサカーフィーを任命した。またハドラマウトにはイブラーヒーム・ブン・ジブラ・アルキンディーを任命した。

ウマイヤ家カリフ、マルワーン・ブン・ムハンマドはウマイヤ朝防衛の為に遠征と戦いの多さ、又増大する反逆者達との抗争の多さ故に「ロバのマルワーン」と綽名された。反逆者

達の中にはハドラマウトとイエメン全土の反逆者である前述の「真理を求める者」と呼ばれたハドラマウト系のアブドゥッラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディーがいた。

マルワーン・ブン・ムハンマドはウマイヤ朝の中で最も優れたカリフの一人であり、また管理、行政、戦争において最も能力のあるカリフの一人であった。しかしながら彼が現れた時には、ウマイヤ朝の王宮は壊滅し、ウマイヤ朝に従う行政州のうち1つ以上のイスラーム州においてウマイヤ朝に対する抵抗運動と反乱が起きていた。

彼と共にウマイヤ朝は終焉し、彼はエジプトのファイユウム村落の1つのブーシールでヘジラ暦132年（西暦750年）に、アッバース家の兵士の1人の手によって殺害された。そしてウマイヤ朝崩壊後アッバース家が興った。

「イエメン概説史」第2巻〔イスラーム史〕P.43～55